

大学生の離人症状の体験について

—対人ストレッサー・精神的健康との関連から—

荒木優花・石田 弓

Regarding university students' experiences of symptoms of depersonalization:
From the relationships with interpersonal stressors and mental health

Yuka Araki and Yumi Ishida

This study examined the effects that status of interpersonal stressors and frequency of interpersonal stressors have on the experience of symptoms of depersonalization, including the factor of mental health status. A questionnaire survey was administered to 364 university students, and the results demonstrated that the frequency of interpersonal stressors had an effect on the students' experiences of symptoms of depersonalization. It was also demonstrated that a higher frequency of interpersonal conflict as a stressor significantly increases the experience of symptoms of depersonalization called “uncomfortable feeling for body sensation and others” for the group with lower mental health status, when compared to the group with higher mental health status. Because interpersonal conflict has a stronger impact on the individual compared to interpersonal dislocation and interpersonal failure, it can be estimated that people with a lower mental health status perceive it more intensely, and that it can become a strong stressor. Furthermore, it was suggested that the frequency of interpersonal dislocation can become a trigger for an experience of symptoms of depersonalization present with an uncomfortable feeling for self, and the frequency of interpersonal conflict can become a trigger for an experience of symptoms of depersonalization present with an uncomfortable feeling for the external world.

キーワード： experience of symptom of depersonalization, interpersonal stressor, mental health status

問 題

離人症とは

離人症とは、自己や外界の非現実感・変容感・疎隔感を訴える症状である（坂本，1989）。離人症者の訴える症状として、例えば「自分が自分でない感じがする」、「身体が他人のもののように自分で動いている感じがしない」、「景色が生き生きと感じられない」といった症状があげられる（松下，

2012)。立山（1998）によると、離人症は外からみただけではわからない主観的な症状であるが、本人には病識があるために、自分の症状に対して違和感を呈したり、苦痛を感じるといった特徴があるという。つまり、それまで当たり前のようにあった感覚がなくなってしまう、それに対して苦しみを感じるが、それは傍からみるとよくわからない、理解されにくい症状であると考えられている。

離人症は、古くから精神医学においてその本質理解に長年の努力が払われてきた。例えば、木村（1963）は、「Haug は Wernicke の考え方に基づき、離人症を次の3つの側面に分類している。一つ目は自分の感情がなくなってしまう、自分がその行為をしている感じがしないなどといった自己意識性の側面であり、二つ目は暑さ寒さがわからなくなったり、身体が自分のものではないような感じがするなどといった身体意識性の側面であり、三つ目は、現実感がなくなったり、ガラスを通して世界を見ているような感じがするなどといった外界意識性の側面である」と述べている。過去には離人症は独立した病気とみなされてきた（貝谷，2009）。しかし、これは他の病気に伴い生じる離人症状を主症状としてみなしてきた過去の見方であると近年では評価されている。他の病気とは、例えば急性ストレス障害や心的外傷後ストレス障害、統合失調症やうつ病、てんかんなどをさし、離人症状はそれらに並存もしくは前駆症状として現れるとされる（田中・北山，2009）。

清水・生田（1992）は調査によって、離人症の発症時の年齢が20代前半に集中しており、青年期に発現することの多い病態として捉えることができることを明らかにした。また、それまでの一般の青年にみられる離人体験に関する先行研究について触れ、健康な人や臨床例を問わず、離人体験は青年期と親和性をもつと述べている。松下（2000）は、青年期の離人感に「世間一般性」忌避的な自己指向性が関わっていると示唆しており、世間一般性忌避的な自己指向性においては、獲得される自己が「世間一般性」を帯びることで自己であることが脅かされるため、世間一般性を自己とは異なる他として排除し続けることで、自己の自立性や主体性が追及されるという。しかし、そのために世間を成立させる働きと自らを成立させる働きを同調できないという側面が離人感にかかわるといふ。また、安藤（1992）は、発達レベルに沿った離人症の治療について言及している。対人場面での他者とのコミュニケーションの問題が大きなテーマとなっていた離人症例から、離人症とは本来認識にかかわる症状であるため、対人認識が主要なテーマを占め始めた最初の自己構造である「規則／役割的心のレベル」とつながりが深いという可能性を示唆している。一方、その次の発達段階である「形式的・自制的レベル」では「自分はいったい何者なのか」という問いが最初に発生する思春期・青年期初期の自己構造が存在すると指摘している。

一方、離人症状は健康な人にも体験されることがある。例えば立山（1998）によると、感覚遮断など孤立した状況や疲弊したとき、あるいは断眠時に一時的にみられるという。また、臨死状態、徹夜明けや重度の疲労状態時でも生じるとされる。これまでの一般学生における調査では、離人症状の体験を経験した者の割合は1～3割から、多い場合には70%にも及ぶとされており（安永，1987）、調査によって異なる。金子（2008）は、離人症状の体験について健常者から病者にわたって生じる可能性があると考え、質問紙などによっても離人感の程度を量的変数として測定可能であるが、量的研究はまだ十分に行われていないため、実証的研究を行うことにより多くの示唆が得られるのではないかと指摘している。こうしたことから、離人症状の体験は特別なものではなく、多くの人が一

度は経験していると考えられる体験である。しかし、何度も離人症状を繰り返し体験し、それにより違和感や苦痛を感じてしまう人もいると考えられる。こうした離人症状の体験を引き起こすきっかけとなる出来事は個人によって異なること、つまり経験した出来事の種類やそれに対する感じ方により離人症状の体験も異なることが予想される。

ライフイベントやストレッサーと精神健康度の関連

同じようなストレスフルな状況にあっても、すべての人が抑うつや不適応状態に陥るわけではない。例えば、その背景にある心理的特性として、悩みやストレスがある中で適応的に過ごしていくためのレジリエンスという概念があげられる(原・鳥川・藤井・古田, 2011)。また、本明(1988)によると、「ストレッサーとは物理化学的刺激のみならず、配偶者との死別や離婚など心理的・社会的諸問題を含む外的環境の出来事である」とされており、このような出来事をストレスフルなライフイベントという。これをある一定期間内に数多く体験することが、身体的・精神的障害(うつ病, 自殺傾向, 心身症)の罹患率を高めるといわれている。丹波・小杉(2006)によると, Billings & Moos(1982)は、ライフイベント体験の増加が抑うつや孤独感などの心理社会的問題の悪化と関連することを指摘している。また、青年にとっての対人関係は、肯定的影響をもたらす反面、深刻なストレッサーとして否定的な影響を与えることも考えられ(橋本, 2000)、対人的なライフイベントは、ストレッサーとなった場合に相対的な衝撃が大きいとされている。対人関係と精神的健康が否定的な関連を示す、すなわち対人関係が個人の精神的健康を脅かすことは少なくない(橋本, 2002)。高比良(1998)は、対人領域と達成領域それぞれで経験されたポジティブまたはネガティブなライフイベントに関する尺度を作成している。そして、両領域は抑うつ症状の予測に寄与しており、なかでも対人領域のネガティブなライフイベントの影響が大きいことがわかった。

離人症状の体験とその原因

離人症状の体験は、緊張・葛藤・欲求不満・抑圧・不安などが背景にあるのではないかという報告が多い(金子, 2008)。小川(1965)は「耐え難い葛藤状況からの回避としての保護作用」として離人体験が生じると述べており、木村(2012)も離人症を一種の防衛機制といえることを指摘している。また、離人症の発症契機について、対人的緊張感の高まりとエネルギーの消耗がみられることが多いといわれている(安永, 1987)。よって、対人関係が個人にとってストレッサーになった場合、自分を守るために、その出来事と自分との距離を置くかのように、離人症状の体験が高まるのではないかと考えられる。

本研究の目的

以上のことから、対人関係が個人にとってストレッサーとなった場合、離人症状を生じさせる可能性がある。しかし、これらの関係について実証的に扱った研究は多くない。また、離人症状の体験については、どのような人が体験しやすいか、重篤化するのかという研究も十分にされていない(田中・北山, 2009)。さらに、離人体験は精神的な疾病の前兆となるといわれているため、離人症状の体験を引き起こす要因を解明していくことは、精神的疾病の予防になるとされている(金子, 2008)。こうしたことから、健康な大学生が経験する対人ストレッサーの内容によって離人症状の生じやすさや体験の内容に違いがあるならば、離人症状をより詳細に理解できる可能性がある。そこ

で本研究では、対人関係上のストレスが離人症状の体験に与える影響について、精神健康度の要因も含めて検討することを目的とする。具体的には、ストレスを感じる対人関係での出来事を想定した場合、どれくらいストレスとして感じるかという個人の特性の要因と、ストレスを感じる対人関係での出来事が実際にどれくらいあったのかという経験頻度の要因が、離人症状の体験に及ぼす影響を検討する。さらに、対人関係におけるストレス度・ストレス頻度は離人症状の体験に影響を与えるが、精神健康度が低い者はそれが高い者より離人症状の体験が生じやすいかどうかについても検討する。

本研究では、離人症状の体験を測定するため、松下（2000）の離人感尺度を用いる。これは離人症者が体験した症状を記した文献をもとに項目を選定し、健康な大学生を対象にして作成した尺度である。また、ストレスとなり得る対人関係を測定するため、日常的に体験する可能性のある項目を集めた橋本（2005）の対人ストレス尺度を用いる。この尺度は対人葛藤（他者からのネガティブな態度や行動に関する項目）、対人摩耗（自他共にネガティブな心情や態度を明確に表出していないが、円滑な対人関係を維持するためにあえて意に沿わない行動をしたり、相手に対する期待外れを黙認するような項目）、対人過失（自身に非があって相手に迷惑や不快な思いをさせてしまうような項目）という3つの因子で構成されている（橋本，2005）。なお、本研究では、対人関係における出来事が個人にとってどれほど強いストレスとなり得るかをストレス一度として測定し、そのストレスを実際にどれくらい経験したかをストレス頻度として測定する。

方 法

1. **対象者** A大学の大学生と大学院生の男性173名、女性191名、計364名（平均年齢20.5歳、 $SD=1.7$ ）であった。
2. **調査時期** 2013年11月と12月に実施した。
3. **調査方法** 調査は集合調査形式および宿題調査形式で実施した。対象者に講義後に調査を依頼した。さらに、知人を通じてあるサークルに調査を依頼した。口頭による説明と、質問紙の表紙の説明文により対象者に調査の内容を伝え、合意を得た上で回答を求めた。回答は無記名で行われた。また、スノーボール法も用いて調査を行った。
4. **質問紙の構成**

(1) 離人感尺度（松下，2000）：離人感を体験している度合いについてたずねる尺度である。得点が高いほど、離人症状の体験を多く経験していることを示す。38項目からなり、「自分の心と身体が離れ離れになってしまったような感じがすることがある」などの項目で構成される。「かなりあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「どちらかというにあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「全然あてはまらない」の6件法。

(2) 対人ストレス尺度（橋本，2005）：得点が高いほど、その対人ストレスを経験する頻度が多いことを示す。項目の対人関係が最近どのくらいあったか、という対人ストレスの経験頻度について尋ねた。「対人葛藤」、「対人摩耗」、「対人過失」（各6項目）の3因子からなり、計18項目で構成されている。「しばしばあった」、「ときどきあった」、「ほとんどなかった」、「全くなかつ

た」の4件法。また、本来は対人ストレッサーの経験頻度について尋ねる尺度であるが、項目の対人関係を経験したと想定した場合のストレス度についても尋ねるため、本研究では教示文と選択肢を変更し、対人ストレッサー尺度とした。教示文は「もしもあなたが、以下の質問のような対人関係を経験した場合、どれくらいストレスを感じますか」と変更した。また、選択肢は「非常に感じる」、「少し感じる」、「ほとんど感じない」、「全く感じない」と変更した。「対人葛藤」、「対人摩擦」、「対人過失」(各6項目)の3因子からなり、計18項目で構成されている。「非常に感じる」、「少し感じる」、「ほとんど感じない」、「全く感じない」の4件法。なお、本調査では対人関係全般におけるストレスを尋ねることとした。したがって、対人ストレッサー尺度の質問項目に表記されている「○○」には、特定の人や属性を記入せず、「相手」と記載した。

(3) 日本版 General Health Questionnaire28 項目短縮版 (GHQ28) (中川・大坊, 1985) : 精神健康度を測定する尺度で、得点が高いほど精神的に不健康であることが示される。Goldberg, & Hillier (1979) によって開発され、中川・大坊 (1985) が翻訳した日本語版を使用した。「身体的症状」、「不安と不眠」、「社会的活動障害」、「うつ状態」(各7項目)の4因子からなり、計28項目で構成されている。本調査では2~3週間前から現在までの健康状態について尋ねた。また、質問項目の内容がわかりにくい、または日本語として不自然なものは、一部の文章を変更した。さらに、質問項目に対する選択肢の文章が不適切であったものは、一部を改編して使用した。各項目に対して4件法で尋ねた。

(4) フェイス項目 年齢、性別、病歴の3つについて回答を求めた。病歴は、これまでにかかった大きな病気がある場合に病名を自由記述させた。

結 果

離人感尺度の因子分析

離人感尺度の38項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の大きさの変化や、各因子に含まれる項目の内容などを考慮すると、4因子構造が妥当であると判断した。そこで、因子負荷量が.40未満の9項目(項目番号33, 4, 2, 36, 15, 19, 32, 12, 21)を除外し、因子数は指定せず再度分析を行った。さらに、そこから因子負荷量が.40未満の2項目(項目番号28, 3)を除外し、因子分析を行った結果、4因子27項目が抽出された(Table 1)。

第1因子に負荷量の高い項目は、「自分自身が自分でなくなったような、他人のような感じがすることがある」、「自分は存在していないのではないかと感じる」と感じる項目であった。この因子は、自分というものの存在について違和感があることや、自らの行動や体験に隔たりを感じていることを表す因子と解釈された。よって、「自己存在の喪失感」と命名した。

第2因子に負荷量の高い項目は、「食べていても味がわからないようなときがある」、「人が何かしているのを見ても、動いているのが目に映るだけで、その人が生きてるように感じられない時がある」などの7項目であった。この因子は、本来あるはずの身体感覚がわからなくなってしまったことや、人との関わりについて違和感があることを表す因子と考えられた。よって、「身体感覚と他者への違和感」と命名した。

Table 1

離人感尺度の因子分析 (主因子法, プロマックス回転)

因子名 (α)		f1	f2	f3	f4
自己存在の喪失感 ($\alpha=.90$)					
31	自分自身が自分でなくなったような,他人のような感じがすることがある.	.78	.05	-.01	.03
27	自分の身体を動かしていても,自分が動いている感じがしないときがある.	.67	.34	-.10	-.04
29	自分の心と身体が離ればなれになってしまったような感じがすることがある.	.66	.07	.00	.07
26	自分のなかに,考えたり,行動したり,話したりしている自分を,じっと見つめているもう一人の自分がある.	.62	-.08	.03	.10
30	自分とまわりの世界とが,うまくつながっていない感じがすることがある.	.53	-.14	.12	.35
25	自分は存在していないのではないかと感じる時がある.	.48	.20	.02	.02
38	いつものように行動していても,人形か機械のような感じで,「自分がしている」という実感がないうときがある.	.45	.34	.07	.04
17	手や脚や頭などが自分のものでないと感じることがある.	.41	.27	-.04	.18
身体感覚と他者への違和感 ($\alpha=.85$)					
20	食べていても味がわからないようなときがある.	.06	.62	.18	-.06
35	温度の違いは分かるが,「暑い」とか「寒い」ということが,いまひとつわからないことが多い.	.01	.59	.12	-.02
18	つねったり叩いたりしても,痛いのかどうかよくわからないようなときがある.	.32	.57	.01	-.05
24	身体全体が借り物のようで,自分の身体でないような感じがする.	.44	.54	-.04	-.07
10	人が何かしているのを見ても,動いているのが目に映るだけで,その人が生きてるように感じられない時がある.	-.09	.53	-.10	.50
9	人と話していても鏡に向かって話しているように感じる時がある.	.12	.44	-.14	.41
1	連想がまったくわかなくなる時がある	-.11	.40	.32	-.05
自己の疎隔感 ($\alpha=.84$)					
14	何かやろう,という気がなくなってしまうことがよくある.	-.05	.00	.67	.11
16	特に睡眠不足や疲れがあるわけでもないのに,頭が働かないような変な感じがすることがある.	-.01	.10	.60	.06
37	思ったことや考えていることを言っているのに,本当にそんなことを思ったり考えたりしているのかどうか,よくわからなくなる時がある.	.27	-.16	.57	.08
11	話を聞いていても,言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある.	-.20	.26	.54	.18
22	そのときによって,自分のいろんな面があらわれるので,どれが本当の自分かわからなくなる.	.39	-.01	.52	-.15
34	昨日何をしていたかも思い出しにくい時がある.	-.14	.26	.52	.04
23	そこに何か物があるとわかっているのに,身体がそれにぶつかってしまうことがよくある.	.16	.23	.44	-.12
外界との疎隔感 ($\alpha=.86$)					
7	まわりの感じが自分にピタッとこない時がある.	.15	-.24	.20	.62
8	風景を見ても,スクリーンのように,生き生きと感じられない時がある.	-.03	.25	.00	.62
5	まわりの人やものがそこに「ある」という実感が,いま一つない時がある.	.13	.06	.01	.62
6	まわりの世界が,自分とはまったく関係なく動いているように感じる時がある.	.06	-.06	.25	.58
13	何を見てもリアルな感じがしない時がある.	.02	.30	.09	.53
因子間相関					
	f1	f2	f3	f4	
	f1	-	.63	.58	.65
	f2	.63	-	.41	.60
	f3	.58	.41	-	.60
	f4	.65	.60	.60	-

第3因子に負荷量の高い項目は、「思ったことや考えていることを言っている、本当にそんなことを思ったり考えたりしているのかどうか、よくわからなくなることもある」、「そのときによって、自分のいろんな面があらわれるので、どれが本当の自分かわからなくなる」などの7項目であった。この因子は、自分の思考に違和感があることや隔たりを感じていることを表すと考えられた。よって、「自己の疎隔感」と命名した。

第4因子に負荷量の高い項目は、「風景を見ても、スクリーンのように、生き生きと感じられないときがある」、「まわりの人やものがそこに『ある』という実感が、いま一つないことがある」などの5項目であった。この因子は、外界や物事に接した際に本来ならば湧き起こると思われる感覚に違和感があることや、その感覚がなくなってしまうと感じることを表す因子であると解釈された。よって、「外界との疎隔感」と命名した。

また、得られた4因子を離人感尺度の下位尺度とみなし、各下位尺度項目の合計点を算出した。項目を得点化する際、「かなりあてはまる」に6点、「ややあてはまる」に5点、「どちらかというとはあてはまる」に4点、「どちらかというとはあてはまらない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「全然あてはまらない」に1点を割り当てた。

対人ストレス一度尺度の因子分析

対人ストレス一度尺度の18項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の大きさの変化や、各因子に含まれる項目の内容、および先行研究の因子に含まれる項目などを考慮した。これにより、3因子構造が妥当であると考え、因子負荷量が.40未満の1項目（項目番号10）を除外し、因子数を3と指定して再度因子分析を行った。その結果、3因子で構成される17項目を採択した（Table 2）。削除された1項目を除き、すべての項目が先行研究と同様の因子に分かれた。よって、第1因子は「対人摩擦度」、第2因子は「対人過失度」、第3因子は「対人葛藤度」とした。

得られた3因子を対人ストレス一度尺度の下位尺度とみなし、各下位尺度項目の合計点を算出した。項目を得点化する際、「非常に感じる」に4点、「少し感じる」に3点、「ほとんど感じない」に2点、「全く感じない」に1点を割り当てた。

対人ストレス一頻度尺度の因子分析

対人ストレス一頻度尺度の18項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の大きさの変化や、各因子に含まれる項目の内容、および先行研究の因子に含まれる項目などを考慮した。これにより、3因子構造が妥当であると考え、因子負荷量が.40未満の1項目（項目番号7）を削除した。因子数を3と指定してその後2回の因子分析を行い、因子負荷量が.40未満の2項目（項目番号9, 14）も削除した。その結果、3因子で構成される15項目を採択した（Table 3）。削除された3項目を除き、すべての項目が先行研究と同様の因子に分かれた。よって、第1因子は「対人摩擦頻度」、第2因子は「対人葛藤頻度」、第3因子は「対人過失頻度」とした。

得られた3因子を対人ストレス一頻度尺度の下位尺度とみなし、各下位尺度項目の合計点を算出した。項目を得点化する際、「しばしばあった」に4点、「ときどきあった」に3点、「ほとんどなかった」に2点、「全くなかった」に1点を割り当てた。

Table 2

対人ストレス尺度の因子分析 (主因子法, プロマックス回転)

		因子名 (α)	f1	f2	f3
対人摩擦度 ($\alpha=.81$)					
11	その場を取めるために、本心を抑えて相手を立てた。	.74	-.09	.00	
15	相手の機嫌を損ねないよう会話や態度に気を使った。	.72	.02	.00	
12	相手に合わせるべきか、あなたの意見を主張すべきか迷った。	.70	.13	-.16	
16	本当は指摘したい相手の問題点や欠点に目をつむった	.59	-.02	.16	
6	あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないよう気を使った。	.56	-.07	.01	
18	本当は伝えたいあなたの悩みや願いをあえて口にしなかった。	.49	.07	.22	
対人過失度 ($\alpha=.75$)					
4	あなたのミスで相手に迷惑や心配をかけた。	-.11	.66	.08	
14	相手の仕事や勉強、余暇の邪魔をしてしまった。	.11	.65	-.18	
1	あなたの落ち度を、相手にきちんと謝罪・フォローできなかった。	-.12	.64	.06	
2	相手に対して果たすべき責任をあなたが十分に果たせなかった。	-.12	.61	.14	
9	相手に過度に頼ってしまった。	.21	.52	-.10	
7	相手にとってよけいな世話かもしれないことをしてしまった。	.07	.47	-.01	
対人葛藤度 ($\alpha=.78$)					
8	あなたと関わりたくなさそうな態度や振る舞いをされた。	-.05	.01	.77	
5	相手からけなされたり軽蔑された。	-.04	-.07	.72	
13	あなたを信用していないような発言や態度をされた。	.00	.13	.62	
3	あなたの意見を相手が真剣に聞こうとしなかった。	.09	-.08	.60	
17	相手の問題点や欠点について注意・忠告をしたら逆に怒られた。	.22	.06	.43	
因子間相関			f1	f2	f3
			f1	-	.22 .38
			f2	.22	- .48
			f3	.38	.48 -

Table 3

対人ストレス尺度の因子分析 (主因子法, プロマックス回転)

		因子名 (α)	f1	f2	f3
対人摩擦頻度 ($\alpha=.87$)					
15	相手の機嫌を損ねないよう会話や態度に気を使った。	.87	-.08	.01	
11	その場を取めるために、本心を抑えて相手を立てた。	.83	-.03	-.01	
16	本当は指摘したい相手の問題点や欠点に目をつむった。	.78	.07	-.06	
18	本当は伝えたいあなたの悩みや願いをあえて口にしなかった。	.68	.09	-.09	
12	相手に合わせるべきか、あなたの意見を主張すべきか迷った。	.59	-.04	.19	
6	あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないよう気を使った。	.54	.13	.02	
対人葛藤頻度 ($\alpha=.81$)					
5	相手からけなされたり軽蔑された。	-.08	.81	-.05	
1	あなたを信用していないような発言や態度をされた。	.00	.72	.04	
8	あなたと関わりたくなさそうな態度や振る舞いをされた。	.04	.63	-.04	
17	相手の問題点や欠点について注意・忠告をしたら逆に怒られた。	.02	.60	.03	
3	あなたの意見を相手が真剣に聞こうとしなかった。	.09	.49	.10	
10	相手が都合のいいようにあなたを利用した。	.10	.45	.03	
対人過失頻度 ($\alpha=.79$)					
2	相手に対して果たすべき責任をあなたが十分に果たせなかった。	.01	-.10	.89	
1	あなたの落ち度を、相手にきちんと謝罪・フォローできなかった。	-.04	.12	.71	
4	あなたのミスで相手に迷惑や心配をかけた。	.01	.05	.62	
因子間相関			f1	f2	f3
			f1	-	.59 .47
			f2	.59	- .50
			f3	.47	.50 -

各尺度の記述統計量

それぞれの尺度の記述統計量を求めた (Table 4)。なお、GHQ28 の項目の得点化は、GHQ 採点法で行った。

離人感尺度の各下位尺度の得点の範囲は、「自己存在の喪失感」が 8~48 点、「身体感覚と他者への違和感」が 7~42 点、「自己の疎隔感」が 7~42 点、「外界との疎隔感」が 5~30 点であった。平均値が全体的に低いことから、離人症状は一般大学生ではそれほど体験されないことが示された。

対人ストレス一度の各下位尺度の得点の範囲は、摩耗度が 6~24 点、過失度が 6~24 点、葛藤度が 5~20 点であった。また、対人ストレス一頻度の各下位尺度の得点の範囲は、摩耗頻度が 6~24 点、葛藤頻度が 6~24 点、過失頻度が 3~12 点であった。GHQ28 の得点の範囲は、0~28 点であった。

対人ストレスが離人症状の体験に与える影響の検討

対人ストレス一度と対人ストレス一頻度が離人感症状の体験に与える影響を検討するために、ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った。対人ストレス一度と対人ストレス一頻度の各下位尺度を基準変数、離人感尺度の各下位尺度を説明変数とした。その結果、対人ストレス一度尺度の各下位尺度は、離人感尺度の各下位尺度には影響を与えないことが明らかになった。つまり、対人ストレス一度は離人症状の体験に影響を与えないことが示された。一方、対人ストレス一頻度尺度の各下位尺度は、離人感尺度の各下位尺度によっては有意な変数もあった。Table 5 に説明変数である対人ストレス一頻度の各変数が各離人感下位尺度に及ぼす影響の向き・大きさ (β) と、説明変数全体が基準変数である各離人感下位尺度を予測・説明する程度 (R^2) を示した。「自己存在の喪失感」に対してモデルは有意であり ($F(2, 361)=18.68, p<.001$)、対人過失頻度が影響を与えていた。「身体感覚と他者への違和感」に対してモデルは有意であり ($F(2, 361)=19.42, p<.001$)、対人葛藤頻度と対人過失頻度が影響を与えていた。「自己の疎隔感」に対してモデルは有意であり

Table 4
各尺度の記述統計量

	平均値	SD
自己存在の喪失感	16.91	7.88
身体感覚と他者への違和感	12.81	5.36
自己の疎隔感	22.68	7.64
外界との疎隔感	13.81	5.77
摩耗度	15.24	3.66
過失度	19.10	2.87
葛藤度	15.99	2.99
摩耗頻度	15.87	4.54
葛藤頻度	11.86	3.56
過失頻度	7.88	2.12
GHQ28	9.94	5.86

Table 5

対人ストレッサー頻度尺度と離人感尺度の各下位尺度の重回帰分析

	自己存在の喪失感	身体感覚と他者への違和感	自己の疎隔感	外界との疎隔感
説明変数	β	β	β	β
摩耗頻度	.16**	-	.15**	.09
葛藤頻度	-	.24***	-	.21***
過失頻度	.21***	.12*	.32***	.28***
R^2	.09***	.10***	.17***	.17***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

($F(2, 361)=36.46$, $p < .001$), 対人摩耗頻度と対人過失頻度が影響を与えていた。「外界との疎隔感」に対してモデルは有意であり ($F(2, 361)=37.34$, $p < .001$), 対人葛藤頻度と対人過失頻度が影響を与えていた。したがって、どれくらいストレスを感じるかという個人の特性ともいえる対人ストレッサー度よりも、対人ストレスを実際にどれくらい経験したかという個人の状態ともいえる対人ストレッサー頻度の方が、離人症状の体験に影響を与えていることが明らかになった。

対人ストレッサー頻度と精神健康度が離人症状の体験に与える影響の検討

対人ストレッサー頻度と精神健康度が離人感尺度の各下位尺度に与える影響を検討するため、階層的重回帰分析を行った。まず、説明変数である対人ストレッサー頻度尺度の3つの各下位尺度(摩耗頻度、葛藤頻度、過失頻度)とGHQ28を標準得点(以下Z得点)に変換した。ステップ1に対人ストレッサー頻度尺度の3つの各下位尺度(摩耗頻度、葛藤頻度、過失頻度)とGHQ28のZ得点を投入し、強制投入法を指定した。さらに、ステップ2に摩耗頻度、葛藤頻度、過失頻度とGHQ28の各Z得点の積を算出して求めた交互作用項を投入し、ステップワイズ法を指定して階層的重回帰分析を行った。以下、それぞれを摩耗頻度×GHQ28、葛藤頻度×GHQ28、過失頻度×GHQ28とした。その結果、「自己存在の喪失感」には過失頻度とGHQ28の β が、「身体感覚と他者への違和感」には葛藤頻度とGHQ28と葛藤頻度×GHQ28の β が、「自己の疎隔感」には過失頻度とGHQ28の β が、「外界との疎隔感」には葛藤頻度と過失頻度とGHQ28の β が有意であることが示された(Table 6)。

「身体感覚と他者への違和感」のみに葛藤頻度×GHQ28の交互作用項が有意であることが明らかになったため、単純傾斜検定を行った。GHQ28のZ得点の平均から1SD高い群をGHQ高群、1SD低い群をGHQ低群とした。各群における葛藤頻度と「身体感覚と他者への違和感」の関連を検討する単純傾斜検定を行った。その結果、高群は葛藤頻度から「身体感覚と他者への違和感」へ正の有意な β を示した($\beta = .20$)。また、低群も葛藤頻度から「身体感覚と他者への違和感」へ正の有意な β を示した($\beta = .02$) (Figure 1)。したがって、精神健康度が低い群は高い群に比べて、対人葛藤がストレッサーとなる頻度が高くなるほど、「身体感覚と他者への違和感」という離人症状の体験に与える影響が大きくなることが明らかになった。

Table 6

対人ストレス尺度と GHQ28, およびその交互作用項と離人感尺度の各下位尺度の重回帰分析

		自己存在の喪失感	身体感覚と他者への違和感	自己の疎隔感	外界との疎隔感
	説明変数	β	β	β	β
ステップ1	摩耗頻度	.04	-.03	.10	.02
	葛藤頻度	.08	.19**	-.09	.15**
	過失頻度	.11*	.06	.26***	.20***
	GHQ28	.39***	.35***	.42***	.34***
ステップ2	摩耗頻度×GHQ28	-	-	-	-
	葛藤頻度×GHQ28	-	.14**	-	-
	過失頻度×GHQ28	-	-	-	-
	R^2	.23***	.22***	.33***	.28***
	R^2 変化量	-	.02	-	-

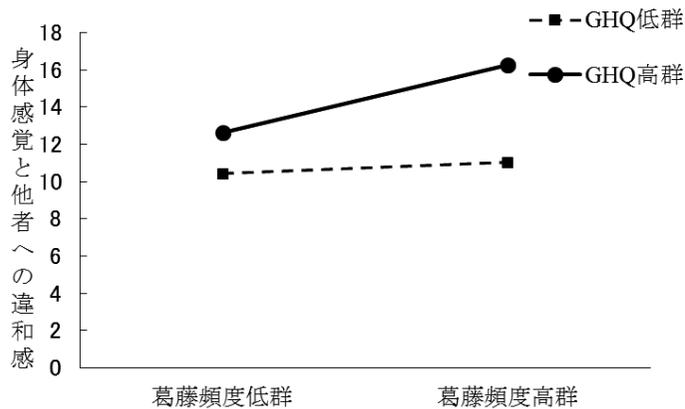
*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 

Figure 1. 葛藤頻度と精神健康度が「身体感覚と他者への違和感」に与える影響

考 察

本研究の目的は、対人ストレス尺度と対人ストレス尺度頻度、および精神健康度が離人症状の体験に与える影響を検討することであった。

離人感尺度の因子構造

離人感尺度の因子分析を行った結果、松下（2000）とは異なる因子構造が得られた。これは分析方法について、松下（2000）では主成分解をバリマックス回転で行ったのに対し、本調査では主因子法をプロマックス回転で行ったことが理由としてあげられる。また、対象者が松下（2000）では231名であったのに対して、本調査では365名と人数が違ったことも理由として考えられるため、本尺度の信頼性や妥当性については今後も検討が必要であると考えられる。

対人ストレッサー度と対人ストレッサー頻度が離人症状の体験に与える影響

対人ストレッサー度と対人ストレッサー頻度が離人症状の体験に影響を与えるかどうかを検討したところ、対人ストレッサー頻度のみが離人症状の体験に影響を与えることが示された。よって、ストレスを感じる対人関係場面を実際にどれくらい経験したかということが離人症状を生じさせやすいことが明らかになった。これは、対人関係におけるストレスが離人症状を生じさせるという予想を一部支持している。しかし、対人関係におけるストレスの度合いは離人症状の体験に影響を与えているとはいえなかった。新福・池田（1954）は、離人症の症状の発現に直接先行する状況について、一定期間に強い感動体験、あるいは持続的な感情緊張が見出されると述べている。また、安永（1987）も離人体験の誘発条件には心身のストレス状況が認められ、新奇場面での緊張といったものからもう少し深刻で複雑な葛藤が潜伏しているとしている。よって、本研究のような日常生活で経験される対人ストレッサーではそれほど衝撃とならず、めったに経験されないほどのネガティブな出来事か、対人関係だけではなく身体の不調などが重なり合うことにより、離人症状が生じやすくなると考えられる。また、それほど大きな衝撃とはならない対人ストレッサーであっても、その回数が増えると、離人症状が生じやすくなることも推察される。

対人ストレッサー頻度と精神健康度が離人症状の体験に与える影響

対人ストレッサー頻度と精神健康度が離人症状の体験に与える影響について検討したところ、対人ストレッサー頻度よりも精神健康度の方が離人症状の体験に影響を与えていることが明らかになった。また、3つの対人ストレッサー頻度がどの離人症状の体験に影響を与えているかを検討した。その結果、「摩耗頻度」は「自己存在の喪失感」と「自己の疎隔感」に有意な影響を及ぼしていた。対人摩耗は円滑な対人関係のために自分の思いを抑えたり、相手に合わせる行動を示しており、その影響を受ける因子はいずれも自己への違和感を呈している因子であると考えられる。一方、「葛藤頻度」は「身体感覚と他者への違和感」と「外界との疎隔感」に有意な影響を与えていた。他者が自分に対して否定的な態度や行動をとったことに関する対人葛藤は、他者や外界に対する違和感を呈する因子に影響を与えることが推察される。さらに、「過失頻度」はすべての離人感尺度の下位因子に影響を与えていた。対人過失は自分の行いに非があり、そのせいで他者に迷惑をかけたことを意味する。対人過失がストレッサーとなる頻度が高まると、自分の感覚への違和感や他者や外界とのかわりに対する違和感という、離人症状全体に影響を及ぼすことが示唆された。

また、対人関係におけるストレッサー頻度は離人症状の体験のきっかけの一つであると考えられるが、精神健康度が低い者は、これが高い者より離人症状が生じやすいと予想されるため、その差異を検討した結果、精神健康度が低い者は対人葛藤がストレッサーとなる経験頻度が増加すると、「身体感覚と他者への違和感」を体験しやすいことが示された。しかし、精神健康度が高い者は、対人葛藤がストレッサーとなる経験頻度が増えても、「身体感覚と他者への違和感」をそれほど体験していなかった。これは、予想された結果を一部支持していると考えられる。対人葛藤は3つの対人ストレッサーの中で、個人に与えるインパクトがもっとも強い（橋本、2005）。対人葛藤は実際に他者から否定されたり、ないがしろにされる体験であるため、自分に責任があると考える対人過失や他者とのやり取りの中で生じる負の感情に目をつむる対人摩耗よりも、直接的なストレス体験に

なると考えられる。そのため精神健康度が低い場合には、対人葛藤を体験したインパクトをより強烈に感じてしまうと思われる。さらに、「身体感覚と他者への違和感」の質問項目には身体感覚に違和感を呈する体験が含まれ、GHQ28にも「身体的症状」という因子が含まれている。そのため、身体の異常が、自分の身体との隔たりを感じさせる体験に結びついている可能性がある。また、「身体感覚と他者への違和感」には、相手がそこにおいて自分とかわっているのに、相手がそこに存在しているという感覚を持たず、違和感を呈する項目がある。対人葛藤のインパクトの強さを考えると、他者とのかわりにネガティブな影響を与えていたことから、いつも人と接する時とは違う感覚を持つ離人症状が生じたのではないかと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、一般大学生を対象に質問紙法を用いて離人症状の体験に影響を与える要因を検討した結果、対人ストレス頻度と精神健康度が離人症状の体験に影響を及ぼし、対人ストレス頻度の種類によって生じる離人症状も異なることが示された。特に精神健康度が低く対人葛藤を経験した頻度が多いと、「身体感覚と他者への違和感」という離人症状が生じやすくなることが示唆された。しかし、臨床場面で出会う離人症者の発症背景にある対人関係上のストレスは、本調査で想定されたストレスとは、異なる可能性が考えられる。そのため、今後は実際に離人症の診断がついている者も対象に研究を行い、その発症契機となるものについて明らかにしていく必要がある。また、離人症状は多岐にわたるため、質問紙により測定することが困難であることも考えられる。よって、本研究で使用した離人感尺度(松下, 2000)の信頼性や妥当性を再検討していく必要がある。そして、質問紙に加えて面接法を用いて、個人の離人症状について詳細に検討していくことが重要となる。

引用文献

- 安藤 治 (1992). 離人症の治療 臨床精神医学, **21**, 1295-1304.
- Bilings, A. C. & Moos, R. H. (1982). Stressful life events and symptoms : A longitudinal model. *Health Psychology*, **1**, 99-117.
- Goldberg, D. P. & Hillier, V. F. (1979). A scaled version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine*, **9**, 139-145.
- 橋本 剛 (2000). 肯定的/否定的対人関係のストレス媒介効果 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 89-101.
- 橋本 剛 (2002). 対人関係領域における支援的/問題的介入と心理的ストレスの関連 人文論集, **52**, 91-106.
- 橋本 剛 (2005). 対人ストレス尺度の開発 人文論集 : 静岡大学人文学部人文学科研究報告, **56**, 45-71.
- 原 郁水・鳥川美香・藤井悠子・古田真司 (2011). 大学生のレジリエンスとストレス反応及び不定愁訴の関連—客観的ストレスの違いによるレジリエンス効果の比較— 東海学校保健研究, **35**, 3-16.

- 貝谷久宣 (2009). 健康交差点 離人症の症状は, 治療を続ければ必ずらくになります 暮らしの手帖
第4世紀, **42**, 140-143.
- 金子優香里 (2008). 離人体験尺度の作成 *Health and Behavior Sciences*, **6**, 69-73.
- 木村 敏 (1963). 離人症の現象学 木村敏著作集1 初期自己論・分裂病論 弘文堂 pp.3-46.
- 木村 敏 (2012). 臨床哲学講義 創元社
- 松下姫歌 (2000). 青年期の離人感に関する研究 心理臨床学研究, **18**, 243-253.
- 松下姫歌 (2012). 心的リアリティを見出す視点からみた心理査定 深田博巳 (監) 心理学研究の
新世紀4 臨床心理学 ミネルヴァ出版 pp.223-243.
- 本明 寛 (1988). ラザルスのコーピング (対処) 理論 看護研究, **21**, 225-230.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 小川信夫 (1965). 離人症 井村恒郎・懸他克躬・島崎敏樹・村上 仁 (編) 異常心理学講座 (第
2次) 第10巻 精神病理学4 みすず書房 pp.1-79.
- 坂本暢典 (1989). うつ病における離人症 精神科治療学, **4**, 1491-1499.
- 清水将之・生田 孝 (1992). 青年期と離人症 臨床精神医学, **21**, 1269-1274.
- 新福尚武・池田教好 (1954). 人格喪失感 (離人症) 井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・村上 仁 (編)
異常心理学講座第2部 精神病理学 (D) 分裂的心性その他の病理 (4) みすず書房 pp.1-44.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社
会心理学研究, **14**, 12-24.
- 田中裕記・北山 修 (2009). 大学生における離人体験のとらえ方: 自由記述式の質問紙による研究
九州大学心理学研究, **10**, 125-131.
- 丹波秀夫・小杉正太郎 (2006). 大学生の社会的スキルがライフイベントの体験に及ぼす影響 社会
心理学研究, **22**, 116-125.
- 立山萬里 (1998). 精神と行動の症候学 B. 離人症 松下正明 (編) 臨床精神医学講座 第1巻
精神症候と疾患分類・疫学 中山書店 pp.196-207.
- 安永 浩 (1987). 離人症 土居健郎・笠原 嘉・宮本忠雄・木村 敏 (編) 異常心理学講座 (第
3次) 第4巻 神経症と精神病1 みすず書房 pp.213-253.